

地域の明日をつくるひと

本をめぐる状況が厳しいなか、山陰で書店を展開する今井書店グループが取り組む「知の地域づくり」。活動を担う「認定特定非営利活動法人本の学校」の五丁泰次郎事務局長にお話しを伺いました。

—「本の学校」の成り立ちを教えてください。

本の学校は、市民の読書推進や図書館づくりの運動と、今井書店・三代、今井兼文の「ドイツのように出版文化を支える職能学校が必要」という遺志を継ぎ、創業二〇周年事業として一九九五年に設立されました。二〇一二年三月には、より中立的で横断的な取り組みを展開するため、今井書店から独立させ「特定非営利活動法人」としています。山陰（米子市）と東京の二拠点が連携をとりながら、地域と全国で活動を展開しています。

—「本の学校」の取り組みを教えてください。

本の学校が取り組んでいる「知の地域づくり」は、出版業界人の育成や他機関との連携により、人が集まる魅力的な書店・図書館等を創り、来てくれた人と本との出会いを作り、その人の読書習慣を育む、そして本から様々な感性や力を得た人材が地域をつくっていく、というものです。その実現のため四つの

活動指針、「生涯読書活動の推進」、「次世代出版業界人の育成」、「未来の出版モデルの創造」、「地域の学び場の拡充」を掲げています。

「生涯読書推進事業」では、読み聞かせ団体や図



書館・学校図書館や地域の人々で構成する「生涯読書をすすめる会」で、読書の楽しさや大切さを伝える活動をしているほか、読書推進活動がより豊かになるよう、会員同士、読書推進団体同士で情報交換・情報発信を行っています。

「次世代出版業界人育成事業」は、新時代の書店人を育成する取り組みです。魅力的な書店空間を創るのは書店人の力ですが、育成は現場に任せられているのが実状です。それではいけないと、出版業界の専門的な知識・教養、日々の接客、情報収集・分析、棚づくりなどのノウハウを学ぶ場として、ドイツの書籍業学校を範に、山陰で「出版業界人基本教育講座」、東京で「本の学校連続講座」を開講しています。「未来の出版モデル創造

「本」との出会いを作り、育む
～知の地域づくりの夢を求めて～

認定特定非営利活動法人 本の学校

(鳥取県米子市)



シンポジウムの様子

事業」では、毎年、東京でシンポジウムを開催し、これからの出版・書店・図書館のあるべき姿を議論しています。直近では、ティーンエイジャーの読書等をテーマに取り上げました。

「地域の学びの場拡充事業」は、大学や図書館等と連携した取り組みです。広島大学大学院文学研究科と、文学や哲学等に親しむ「文藝学校」を開催しているほか、昨年度は

鳥取県立図書館等の後援で、「ムーミン」を題材に「子どもと読書」について講演会を行いました。

—取り組みのなかで、どのような課題を感じていますか。

発定から年月が経ち、会員が高齢化しています。担い手の発掘と若年層の育成が課題になっています。地方を拠点に活動している点では、出版社の多くが東京に集中しているため、移動の制約を受けるといったことはあります。ただ、私たちは「地方から市民と一緒に情報発信する」、「地方から情報をつなげる」ことに意義があると考えています。

地域の疲弊、衰退など首都一局集中による弊害が指摘されるなか、地域の再興、活性化のためには、考え創造する市民による地域の自立を育む「大学、図書館、書店、文化施設、教育研究機関等の協力による知の地域づくり」と、「組織を越えたネットワークによる学びの場の拡充」が不可欠です。

本の学校は、新たな読者、著者を創造・育成すること、そしてそれらをつなぐ出版社、取次、書店、図書館などの「出版業界人」を育成し、新たな出版モデル像を提示することで、デジタル化時代の新たな「本との出会いの場の創造」を果たしていきたいと思っています。

【編集後記】

本が人を変え、地域を変えるという考えに感銘を受けました。本に接する機会を増やしましょう！（鳥取・管財課井川、坂本、総務課濱岡）